

聯合ニュース（日本語訳）

<ラムサール総会> 『コウノトリ復元ノウハウ』お願いします」

金台鎬（キム・テホ）知事、日本の「コウノトリ市長」に訓手を要請…「コウノトリ 地域経済を助ける」

（昌寧＝聯合ニュース） チョン・ハック記者

ラムサール総会（訳者注／ラムサール条約締約国会議）が進行中の30日、慶尚南道庁では、絶滅したコウノトリを復元（訳者注／野生復帰）させることでブランドマーケティングに成功した日本の市長と、トキを中国から空輸して復元する宿題を授かった慶尚南道知事が実りある出会いを果たした。

ラムサール総会でコウノトリの復元について発表するために道庁を訪問した人こそは、既に「コウノトリ市長」として有名になって久しい、日本の豊岡市、中貝宗治市長だ。

ラムサール総会開幕直前、すべての道政を親環境的（訳者注／環境にやさしい）に推進すると宣言をし、コウノトリ市長についても言及した金台鎬知事は、中貝市長と会うと挨拶もほどほどに「コウノトリを復元するのに、費用はいくらかかったのか？」と率直にたずねた。

中貝市長は「コウノトリ 129羽を復元・繁殖させて、29羽が野生でいる。100羽は鳥かごの中で保護している」とし、「コウノトリ復元には100億円かかった」といった。

放鳥されたコウノトリは5か所で、8羽のヒナを繁殖させ自生に成功していることも明らかにした。

となりに座った李仁植（イ・インシク）ラムサール総会民間推進委員長は、「コウノトリの復元までには50年近くもの時間がかかったが、実質的な復元事業は17年間だ」と説明した。

市長はつづけて「豊岡市でコウノトリが復元されてからは、コウノトリも住める環境があるということが認められて、米は一般的な価格よりも80%から110%までも高い値段で売られている」と自慢した。

ここで生産された米をつかった清酒は、ほかの酒の2から3倍の値段で売られていて、ほかの地域から豊岡の米を使って酒を造りたいとの申請が後を絶たないという。

中貝市長は、サンプルとして持ってきた酒を見せながら「この酒はヨルダンの国王が好んで飲む酒」とも紹介した。

コウノトリ復元に成功したのは、もちろん、無農薬・親環境農業が根付いたという事実が日本中のマスコミによって大きく報道されたことによるが、ほかの場所に移転を考えていた太陽電池メーカーまでもがやってきて、大規模な投資をすることによって雇用も創出されて地域経済が新しい活力素（訳者注／活力源のひとつ）を得たことも、その要因だ。

「コウノトリを育む農法」で作られた米と特産物である「但馬牛」を求める観光客が急増することにより、9万名ほどの小都市が裕福な環境都市に完全に変身したということだ。

この都市が親環境農法を取り入れるきっかけとなったのは、地域の自慢であったコウノトリが絶滅したことを目の当たりにした市長と公務員、農民、市民たちが進み出て「コウノトリが住める環境を取り戻そう」と決意してからだ。

もちろん、その過程には、化学農法に慣れ親しんだ農民から「コウノトリが大事なのか？人間の方が大事じゃないか？」という反発を受けたこともあったと、中貝市長は回顧する。

日本の市長から経験談を聞いた金知事は、「慶尚南道は最近、中国からトキひとつがいを譲り受けて復元に向けて努力している」と話し、「コウノトリ復元と親環境農法のノウハウを伝授してほしい」と要請した。

同席した昌原（チャンウォン）・周南（チュナム）貯水池と、昌寧（チャンニョン）・牛浦（ウポ）近隣の住民代表と公務員たちが訪問すれば喜んでノウハウを分け合うと約束したコウノトリ市長は、「トキやコウノトリのためではなく、自分たちのために環境をよくしようという考えが大事だ」と強調した。

金知事は「コウノトリを活かしながら地域経済を一緒に考えた市長の着眼に敬意を表する」とし、「コウノトリも住める環境で栽培された農作物というブランドを持つ、貴重な価値を学びたい」と話した。

写真キャプション

ラムサール総会が進行中の30日。慶尚南道庁では、絶滅したコウノトリを復元したことで「コウノトリ市長」と呼ばれている日本の豊岡市 中貝宗治（写真右）市長が、ラムサール総会を開催している金台鎬知事を表敬訪問。コウノトリ復元のノウハウを伝えた。